

ISSN 0910-2396

# 野鳥大判

—北海道—

第 83 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成 3 年 3 月 21 日



オオワシ 1990 撮影者 石橋孝継



## もくじ

私の探鳥地 (16) .....	石谷 義一 .....	2
吉野ケ里のカササギ .....	武沢 和義 .....	3
堀株川河口及びその付近の鳥類 .....	富川 徹 .....	4
話題の鳥たち (3) .....	井上 公雄 .....	12
探鳥会報告 .....		13
探鳥会案内 .....		15
鳥民だより .....		16

## 私の探鳥地 ⑩

### ノスリが渡って来た

— 砂崎海岸にて — 石谷 義一

10月22日、砂崎へ行く。もしかしたら、まだ居残っている、ハマシギ、トウネンに会えるかもしれない。砂崎の浜は、もう晩秋のたたずまい。今日は波も静か、振り返ると、砂原岳（駒ヶ岳）は紅葉し、青空にくっきりと、聳えたつ。

双眼鏡を持ち、フィールドスコープを担いで、浜に出る。右から左へと、渚をなめる様に探すが、ハマシギもトウネンもない。もう南へ渡ったのか。海上には、ウミアイサ3羽、カモメ類多数、ウミウが、左右から海面をすれすれに飛び交う。浜から牧場の方へと移る。カラス、トビの群、灯台の近くまで歩く。水溜りに、何時もはいる、カモの姿もない。また、浜に戻り、砂に腰を降す。

しばらくして、鳥の群が対岸（伊達火発の煙突の左手）からやってくる。双眼鏡を手に覗くと、……なんだ、トビかと、がっかり。次第に頭上に迫る。ところが、10数羽のトビの後に、違う鳥が混じっている。1羽、2羽と近づく。ノスリだ……。次々と頭上に向かってくる。先に来たトビ達は、砂原岳へ吹き上げる上昇気流に乗って、旋回を始める。その中に、1、2羽のノスリを再び発見。斜め上からの太陽の光にすかして、ノスリの翼角の黒色斑が、はっきりと確認出来る。それに気をとられ、ノスリの羽数を数えるのを、しばし忘れてしまった。次々と間をおいて、対岸から来る。20羽以上は数えた。

もう何年か前、測量山ヘワシ・タカの渡りを見に行った時、対岸の駒ヶ岳へ向って、渡って行くのだと聞かされた。それで、その時期になると、何度も砂崎に足を運

び、ノスリを待ちかまえていたのだが、一度も私の目で捕えたことがない。多分、駒ヶ岳を目標にするのだろうけれど、左に変針して恵山岬に向うのではないかと推測していた。

今年10月初旬、恋路ヶ浜（伊良湖岬）で、チゴハヤブサの渡りを調査している旭川の方（お名前は聞かずじまいであった。）と会った。その方のお話によると渡島半島の矢越岬に集るとの事であった。それが、今日私が見た、少なくとも20羽以上のノスリが、トビを先導に、対岸から渡って来たのだ。今年だけに限ったことなのだろうか。それとも、毎年ノスリのあるグループだけが、砂崎の上空を通過するのを、私が日時の違いだけで、会えなかっただけなのか。ノスリの姿が途絶えたところで、双眼鏡を右にずらし、測量山の方向にむけると、5羽程の大型の鳥が、恵山の方へ向って行く。彼等もノスリなのではなからうか。本当に感激の一刻であった。

#### 後記

- ・観察日時 1990年10月22日(月)午前10時40分  
(トビの先頭)～午前11時迄(最後のノスリ1羽まで)
- ・場所 茅部郡砂原町砂崎灯台近くで
- ・天候 快晴・微風(北西)
- ・次の日(23日)午前9時～正午までノスリには会えない
- ・翌々日(25日)午前11時頃トビと一緒に旋回しているノスリ2羽を見る。
- ・更に29日(月)午前10時25分同じ方向から、海面すれすれにヒヨドリの一団(およそ200羽程)渡って来た。

〒049-23 茅部郡森町森川町281～48

## 吉野ケ里のカササギ

武 沢 和 義

11月23日からの3連休、急に思い立ち、宿と足を友人に頼って女房と北九州に小旅行をした。機上から見える空港近くの山肌は真っ赤な斑点におおわれていた。ハゼを中心とした紅葉の盛りなのである。

まずは太宰府に寄ってから、吉野ケ里に行った。着いて車から降りたとき、頭上を3羽のカササギが飛びすぎた。吉野ケ里遺跡は、物見やぐらと城柵を持った弥生時代の環濠集落跡であるが、「魏志倭人伝」に女王卑弥呼が住む宮殿は楼観、城柵が蔽かに設けられていると記述された耶馬台国とそっくりだったため、発見されたときには、現代人にとってのロマンとして大いに騒がれた。その「魏志倭人伝」であるが、耶馬台国には「牛、馬、虎、豹、羊、鵠」がいないという文章で、カササギの名がでてくる。私達が見知らぬ土地に行くと動物に興味を示すときには「ここには何々がいる」と感心するのが普通であると思う。「何々がない」という場合は、あたりまえに見慣れている動物の姿が見えないときに限られるだろう。ウシとウマとヒツジを家畜の代表として、トラとヒョウを猛獣の代表として挙げたとすれば、これらがないというのは、よくわかる。

しかし、鳥類の代表が何故カササギなのだろうか。今いるカササギは豊臣秀吉が朝鮮半島を侵略したとき、佐賀の鍋島直茂と柳河（現在は柳川）の立花宗茂が持ち帰って放鳥したのが繁殖したものと伝えられるが、カササギの放鳥はこのときが初めてではなく、遠く聖徳太子の時代にも行われたと記録されている。「日本書紀」の推古6年の記事に、百済に派遣されていた役人が帰国の際に、カササギを2隻（多分2つがい）持ち帰り献上したので、難波社（なにわのもり、大阪の森ノ宮）に放つたら、枝に巣を作って雛を育てたと述べられている。「日本書紀」は引き続いて新羅がクジャクを、百済が白キジを献上したと記録する。カササギがこれら珍鳥、吉鳥と同列扱いを受けるのは、瑞鳥である白カラスの一種と考えられたためだろう。動物や鳥のアルビノのめでたさについては、孝徳天皇の大化5年に白キジが献上されたときの記事に詳しい。このときには、吉祥を喜んで白雉と改元したことを述べ、過去にアルビノ（キジ、カラス、スズメ、シカ）が見られた例をあげて、その喜びを伝えている。

金達寿（キムタルス）は「日本の中の朝鮮文化」の中で、推古6年の記事を引用し、朝鮮人にとってカササギは望郷の念を誘うもので、古代の朝鮮からの渡来人にとっても懐かしいものであったらと述べている。また何に書いてあったかは忘れたが、谷川健一は「魏志倭人伝」にカササギが出てくるのは、文章の下書きを書いたのが、

耶馬台国に派遣されていた朝鮮半島の人間であったためと推定していた、と記憶している。朝鮮半島の影響を無視しては古代日本の政治や文化を語れないので、カササギを単なる鳥とするよりも日朝交流の架け橋と考えるのも面白い見方であると思う。

架け橋といえば、百人一首の大伴家持の歌「鵠の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」が連想される。この歌は七夕の夜に鳥鵠（うじゃく、カササギ）が羽根をよせあつて天の川に橋をかけ、織女を渡すという中国の故事によったもので、今でも七夕の飾り付けにカササギのモチーフを使う。

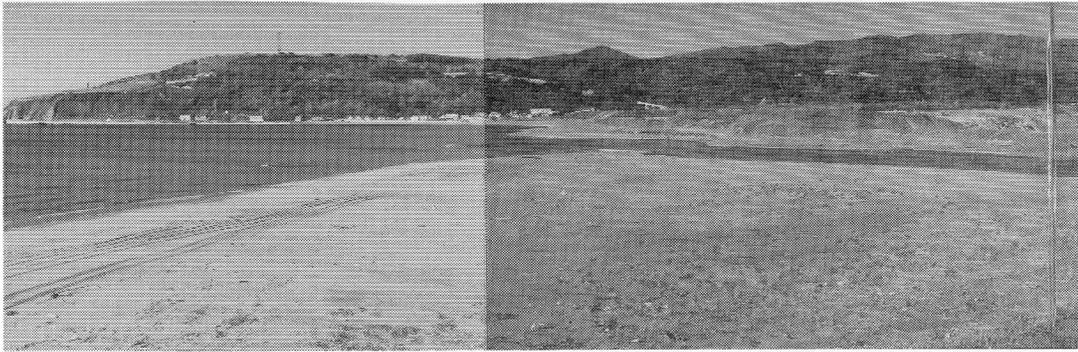
復元集落を見学しているとき、数羽のカササギが北に向かって飛んで行き、竹林を含む森についた。プレミナでのぞくと、樹上でカササギが戯れているのが見えた。向きをかえて南方を見ると、田園風景であり、コサギがゆっくりと舞っていた。ふと、妙なことを空想した。黒を白と言いくるめるとき、カラスをサギにたとえることがある。カチガラス（カササギの通称）をカササギというのも、その一種ではないかと思ったのである。

実際には見たことがないが、八坂神社の祇園祭（津和野、京都）に鷺舞がある。「橋の上におりた鳥は何鳥、かわささぎの、かわささぎの、ヤァ、鷺が橋を渡した、鷺が橋を渡した、時雨の雨に濡れとおり、とおり」という囃し言葉にのって、2羽の白鷺に扮した男が舞う。ここにもカササギの渡した橋がでてくる。文献には鷺舞、笠鷺舞、鷺鉾、鵠鉾などの言葉がのっており、これらを結びつけると、カササギとシラサギに共通するイメージが見えてきそうである。

このことに関して、野本寛一の「生態民俗学序説」という本に興味ある考察がなされている。鵠をカササギと読み、カチガラスを示すと見るのは朝鮮語のカンチェギからきている（従ってサギとは関係ない）。一方、冠羽を持つアオサギなどをカササギ（冠鷺＝笠鷺）と呼ぶことがあるので、両者の間に混乱が生じた。鵠が橋を渡すという伝説が知識人の間に先ず受け入れられたが、これが農耕祭礼に入って民衆が受容する過程で、鵠から鷺への変化が生じた。つまり樹上の鳥が天上に橋を渡すイメージから水辺の鳥が橋に降りるといったイメージへの移り変わりがあったというのである。なお祇園祭の鷺舞の写真を見ると、鷺舞の鷺はコサギのようである。

あくる日、立花宗茂から始まる立花藩の居城のあった柳川に行って船下りをしながら存分にカササギとおつきあいをした。その帰り、面白い光景を見た。畑で耕運機がおこした土といっしょに掘り出された虫をねらって、コサギが金魚のフンのように耕運機の後ろにつながっている。これもまた、カササギの渡せる橋の一つだろうか。

〒064 札幌市中央区南4条西26丁目



## 堀株川河口及びその付近の鳥類

—春の水鳥を中心として—

富川 徹

本誌ではこれまで「各地の野鳥」をはじめとして、「探鳥地案内」や「私の探鳥地」など、道内各地の野鳥情報を提供している。しかしながら、日本海沿岸に面する地域情報、とりわけ野鳥記録でも鳥類相についてまとめたものとなると、案外と少ないことに驚く。

そこで私は日本海沿岸の中でも、以前から注目している堀株川河口及びその付近（共和町、泊村）の水鳥を観察記録しておきたいという目的から1987年～1990年の春季にかけ毎年足を運んでいる。ここでは18回の観察でまだ不十分な点もあろうが、関係地域における春季の鳥類出現の傾向並びに鳥類の動態等を知る手がかりとなれば幸いと思い、中間段階ではあるがその概要を整理したので報告する。

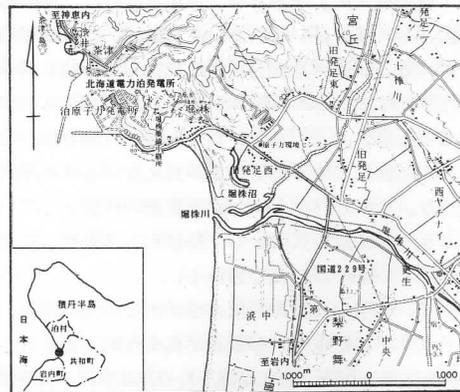


図1 観察位置図

### <観察地の概要と方法>

堀株川は後志管内共和町の中央部を西方に流れ、日本海に注ぐ二級河川であり、南東のワイスホルン(1,045.8m)、東の倶知安峠(約230m)、北東の銀山(640.5m)及び八内岳(943.6m)などに水源を有する流路延長29.6m、流域面積281.7km<sup>2</sup>の河川である。堀株川周辺地域は三角州性の沖積平野(岩内平野と呼ばれる)が形成され、半扇形に発達した農耕地は道内有数の水稲地帯となっている。

観察地は(図1)に示すとおり、積丹半島の西付け根にあたり、北海道電力泊発電所の南側に位置する。堀株川の河口から概ね国道229号までの右岸左岸域一帯の範囲で、面積約3.5km<sup>2</sup>(陸地部分)の極めて限られた区域である。にもかかわらず日本海の荒波と堀株川の運ぶ土砂によってつくられた砂州・砂丘などの河口環境はもとより、沼(堀株沼)、疎林・防風林、水田、畑、人家など、狭いながらもコンパクトに多様な環境がセットされていることがこの特徴にあげられよう。

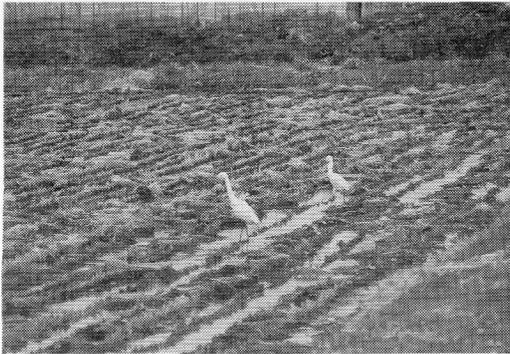
観察は原則的に、観察路及び観察ポイントを設けてそ

こに出現する鳥の種類と個体数を記録する方法によった。

### <観察結果>

観察結果は3月(3回)、4月(9回)、5月(3回)、6月(3回)の春季に実施した合計18回で14日30科93種を確認した(表1)。まず、記録された鳥類の目別の構成をみると、スズメ目の30種(32.3%)が最も多く、次にガンカモ目22種(23.7%)、チドリ目16種(17.2%)、ワシタカ目5種(5.4%)と続く(図2)。また、目単位の水鳥と陸鳥の構成では、水鳥7目49種(52.7%)、陸鳥7目44種(47.3%)となり、水鳥の記録種の方が多い。一方、月毎の観察頻度はそれぞれ異なるものの観察記録から出現種数を比べてみると、4月が最も多い71種であり、次いで5月59種、6月32種、3月31種となる。これらのうち水鳥に注目すると4月は39種で全水鳥のほぼ80%が記録され、次いで5月29種(58.0%)、3月21種(42.0%)、6月9種(18.4%)となっており、4月にピークがある(図3)。

こうしてみると、この時期の堀株川河口及びその付近は、海、河川及び沼といった内外水面の環境特性を大きく反映しているものとみることができると同時に、春の



ダイサギ

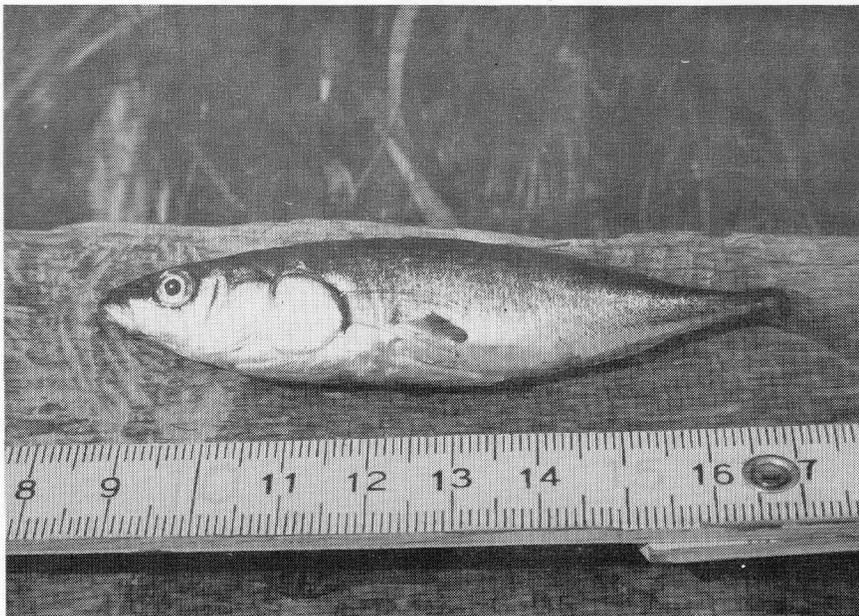
野鳥の移動期にあたるため通過鳥の多いことが示唆される。

<主な水鳥の観察記録>

鳥類リスト(表1)に示した摘要で略記しており、内容に重複もあるが、いくつかの水鳥について観察記録を若干補足しておく。なお、ここでいう水鳥は前述の目単位のものから観察されているカワセミ、ハクセキレイについては省略する。

ダイサギ・コサギ

ダイサギは1987年4月25日(2羽)、4月27日(2羽)、5月16日(1羽)、コサギは同年4月25日(1羽)、4月27日(1羽)に観察。ダイサギの1羽は20日間以上の滞在が認められる。4月の観察では両種は常に行動を共にし、堀株沼や周辺の水田及び農用水路に降りて採餌していた。沼付近ではイトヨの捕食を観察している。



ダイサギ・コサギが捕食していたイトヨ

マガン

1987年4月5日上空を北東方向に飛ぶ8羽の編隊を観察する。

コハクチョウ

1987年4月5日堀株川で8羽、1988年4月3日海上を飛ぶ3羽と水田に降りている9羽を観察する。

カモ類

カモ類は比較的多くの種類が認められた。数ではオナガガモが最も多く1987年4月4日には約3,000羽、1988年4月3日には約1,700羽を観察している。また、コガモ、マガモ、ヒドリガモも数百羽単位を記録している。

特徴としてあげられることは、大群のカモのほとんどが堀株川で認められた他、1987年、1988年の4月では海上沖(浜より500m~1,500m)との往来行動がしばしば観察されている。



海上のヒドリガモ・オナガガモ

バン

全て堀株沼であり、同時に2つがいを観察したこともある。

シギ・チドリ類

河口は狭くも干潟のできる条件を満たしわずかに形成が認められつつも、シギ・チドリ類の観察は思ったより少ない。河口での観察記録は1988年4月29日のホウロクシギ(1羽)と同年5月7日のコチドリ(1羽)、アオアシシギ(1羽)のみである。その他ではツルシギは1988年5月21日水田(1羽)で、イソシギ、

オオヅシギは堀株川流域で、またアカエリヒレアシシギは1987年4月27日に死体(1羽)を確認したに過ぎない。なお、今回の記録ではないがアカエリヒレシギについては、過去(1981.5.21)に河口付近及び沼の縁で採餌している数羽と、上空を飛ぶ378羽(写真によりカウント)を観察したことがある。

カモメ類

8種類が確認された。このうち、オオセグロカモメ、ウミネコは月により多少個体数にバラツキがみられるが毎年比較的多く観察された。

図2 目別構成

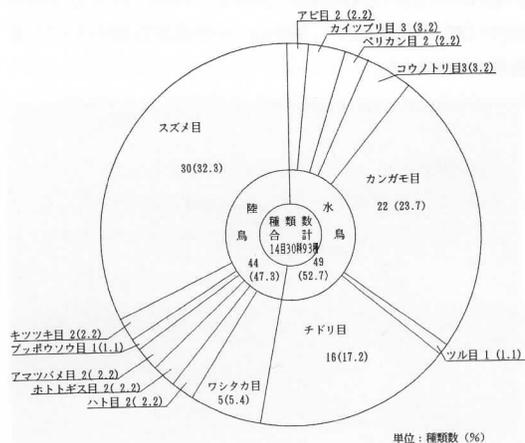
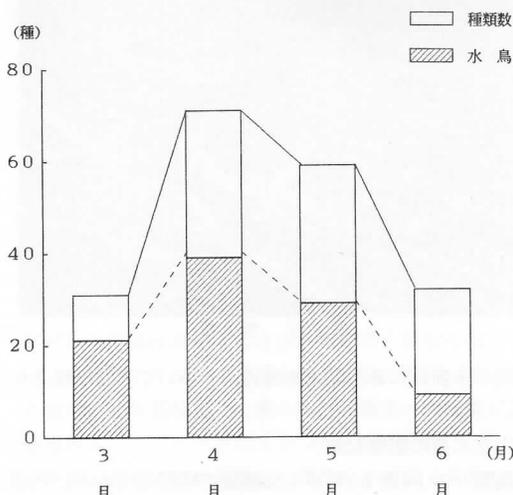


図3 月別種類数の変動(春季)



月	3月	4月	5月	6月	計
種類数	31	71	59	32	93
水鳥の種類数	21 (42.9)	39 (79.6)	29 (59.2)	9 (18.4)	49 (100.0)

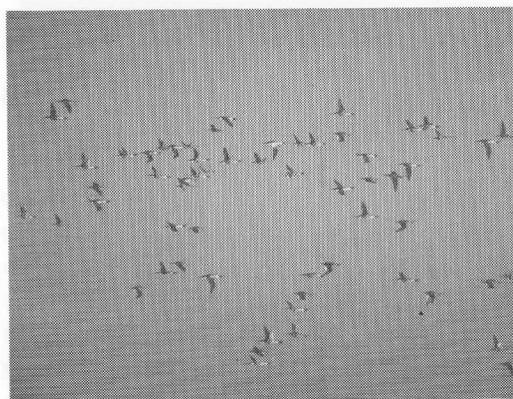
※数字は種類数、( )は全水鳥に占める割合(%)

実態把握が望まれることは言うまでもない。

これまで、この地域及びその周辺は保護の観点での法的規制等の対象にはあがらず、どちらかと言えば堀株沼については狩猟における最良の場として位置づけられてきた感がある。前述したとおり、周りには良い林は見あたらないもののコンパクトに多様な環境を有しており、狩猟の規制に加えて現状の自然環境が維持できれば、この地域を通過する水鳥にとって数少ない移動中継地としての役目を担うことだろう。

最近になって、堀株沼の北側一部が地域振興に係る開発により埋め立てられ、わずかに狭まれたことは事実である。とはいえ残存する沼地と、ヨシを中心とした湿地環境は概ね良い状態が保たれているとみえる。今後のこの地域の自然環境保全上の課題としていえることは、恵まれた貴重な自然資源を損なうことなく地元の将来に受け継ぐ「地域づくり、まちづくり」に生かしていくよう強く願うものである。

〒064 札幌市中央区北6条西28丁目  
円山北町団地3-203



飛ぶオナガガモの群れ

<おわりに>

わずか4年の18回の観察、しかも春季のみの観察記録ではあるが93種の鳥類を確認できた。ともあれ気になっていた堀株川河口の鳥類を知るうえで足を踏み入れた甲斐があったものと思われる。今後は通年の観察を通じた季節変動、さらには繁殖鳥・越冬鳥などの生息状況等の



目	科	種	観 察				摘 要
			3月	4月	5月	6月	
チドリ	カモメ	オオセグロカモメ	○	○	○	○	
		シロカモメ	○	○	○		
		カモメ		○	○		
		ウミネコ	○	○	○	○	
		ミツユビカモメ		○	○		
		アジサシ			○		
	ウミスズメ	ウミガラス	○				'89.3.21海上(3羽)
ハト	ハト	キジバト		○	○	○	
		アオバト		○			
ホトトギス	ホトトギス	カッコウ			○	○	
		ツツドリ			○	○	
アマツバメ	アマツバメ	ハリオアマツバメ				○	
		アマツバメ			○		
ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ			○		
キツツキ	キツツキ	アカゲラ	○				
		コゲラ		○			
スズメ	ヒバリ	ヒバリ	○	○	○	○	'88.4.29 周辺域で多数
		ツバメ		○	○		
	イワツバメ			○	○		
	セキレイ	ハクセキレイ	○	○	○	○	
	ヒヨドリ	ヒヨドリ		○	○		
	モズ	モズ		○	○	○	
		アカモズ			○		
	ヒタキ	ノゴマ			○		
		ノヒタキ		○	○	○	
		イソヒヨドリ		○	○		
		アカハラ			○	○	
		ツグミ		○			
		ウグイス		○			
		コヨシキリ		○	○	○	
		オオヨシキリ			○	○	
	シジュウカラ	ハシブトガラ	○	○			
		シジュウカラ		○	○	○	
	ゴジュウカラ	ゴジュウカラ		○			
	ホオジロ	ホオジロ		○	○	○	
		ホオアカ		○	○	○	
		アオジ		○	○	○	
		オオジュリン		○	○	○	
	アトリ	カワラヒワ		○	○	○	
		ベニマシコ		○			
		シメ		○			
	ハタオリドリ	スズメ	○	○	○	○	
	ムクドリ	ムクドリ		○	○	○	
カラス	カケス	○					
	ハシボソガラス	○	○	○	○		
	ハシブトガラス	○	○	○	○		
合 計			31	71	59	32	14目30科93種

(注) ○印は確認を表わす。





(3)

年 月 日	1987年												1988年												1989年					1990年		
	4. 4	4. 5	4. 25	4. 27	5. 16	6. 7	6. 14	3. 12	4. 3	4. 9	4. 29	5. 7	5. 21	3. 21	4. 18	6. 10	3. 25	4. 15														
イワツバメ						12						8																				
ハクセキレイ	1	1	4	2		1	1	2	4		1	1	2			2		1														
ヒヨドリ				4							3	2																				
モズ			1	1	1	2					2		1					2														
アカモズ													1																			
ノゴマ													1																			
ノヒタキ			2	1	4	1					2	2	2			1																
イソヒヨドリ											1	2																				
アカハラ					1											1																
ツグミ			9	4							86				16																	
ウグイス											1																					
コヨシキリ			2	1		1	1	2					1			2																
オオヨシキリ													1			1																
ハシブトガラ							8											1														
シジュウカラ					2							2				4																
ゴジュウカラ																		1														
ホオジロ	1	2	1			2						1	1																			
ホオアカ			1		1							1																				
アオジ			1		4	2						1	3			2																
オオジュリン			3	4	2	1	1	3				2	2			1																
カワラヒワ	6	15	17	2	4			4			10	6	3	2	8	3		2														
ベニマシコ												2																				
シメ			1																													
スズメ	3	18	5	2	1	8	2	2	8	15		1	1				3	6														
ムクドリ	2	6	6		10	4		5		22		4																				
カケス							1																									
ハシボソガラス	6	8	5		9	6	21	2	13	6	3	8	4	2	2	3		1														
ハシブトガラス	2	2	15	2	3	2	3	4	1	8		2	1		3			6														

## 話題の鳥たち (3)

井上 公雄 (本会幹事)

### ミュビゲラ32年振りの確認

約30年に亘り確認情報がなく、絶滅したのではと心配されていた幻のキツキ、ミュビゲラが1988年9月1日発見縁の地、上士幌町十勝三股で発見、確認、写真撮影にも成功した。ミュビゲラは昭和17年本会元会長井上元則氏により、わが国で初めて十勝三股で発見、確認され以後昭和31年同じ大雪山系で、伐採木から幼鳥3羽が見つけれ生息の確認がされた後、大雪山系を中心に数例の鳴き声や目撃情報があったものの生息は未確認のままで、環境庁から特殊鳥類(絶滅の恐れのある鳥類)に指定されている。

今回の確認は鳥類関係者の間で注目されると共に、ミュビゲラの生息には広大な針葉樹の原生林が必要で、改めて原生林と生物の関わりの深さを、認識させられることになった。



ミュビゲラ 田中康夫撮影

ミュビゲラは北半球高緯度に広く分布し、その分布は略々北方針葉樹林の分布と重なる。キツキ類の中で、これ程北方針葉樹林と分布の重なる種は他にない。つまりキツキ類の適応放散の過程で、北方針葉樹林に生活の場を得たのがミュビゲラ、と言うことが出来るのではなからうか。ミュビゲラの生息地が確認された地域は大雪山系の中では比較的ゆるやかな山地で、下方はミズナラ、イタヤカエデ、シナノキ、カシワ等の広葉樹の割合も多いが、標高が高くなるに連れダテカンバの割合が高くなり、トドマツ、エゾマツ、アカエゾマツの針葉林と

前述の広葉樹が織りなす、天然の針広混交樹林の豊かな森林を形成している。

本道の屋根とも言われる中央山地は原生林が多く、本道の中でも針葉樹の密度が最も高く、ミュビゲラの生息に適合した地域になっている。これらの自然条件はミュビゲラの採餌の対象である或る種の寄生昆虫の発生し易い、成熟したエゾマツの多い事と密接な関係があるものと見られ、生息環境での種の保護と繁栄への配慮が強く望まれる。ミュビゲラはスカンジナビア半島、ヨーロッパ北部、北米大陸の温帯から寒帯にかけ広く分布し、11亜種に分けられる。留鳥でアカゲラより幾分小さめの約22g 雌雄はほぼ同色、雄の頭頂は黄色、全体が黒く白色の眉斑は背中白色につながる。腹部は白色で翼に小さい斑点があるがめだたない。足指は第一指はなく3本である(ミュビ)目の下から頬の黒色は顎線、肩羽及び、翼の黒色につながっている。キョツ、キョツと鳴き、アカゲラに良く似た声量、音色をしている。

針葉樹の枯木の1-5米の高さの幹に穴を掘り、巣として3-5個の白色無斑の卵を産み雌雄交代で12-14日抱卵する。単独又は番いで生活し群れはつづらない。冬のクロサギは初観察?

本州中部以南の温暖な地には通年生息しているが、本道での観察記録は極めて少ないと言われているクロサギ(黒色型)が様似で観察された。

此の珍しいクロサギを観察したのは栗山町在住の高校教師沼野正博氏で、1月13日午後道東方面での探鳥を終え広尾、庶野、えりも岬等の港に立ち寄り様似にも足を止め港内を探鳥中、西防波堤方向から東へ向かって海面を低く飛び東防波堤側の岩場に降りたクロサギを見た。

此の時季暖冬とは言っても北海道でクロサギは珍しいのでは、と写真を撮ろうと接近を試みたが間もなく飛び立ち遠くの海岸へ去ってしまった。午後の曇り空と言うことから写真は無理と飛び去る様子をビデオに撮影した。4年程前迄和歌山県に住み、野鳥の会に所属クロサギは差程に珍しくなく顎を伸ばして飛ぶ様子、大きさと全体の黒褐色、脚の黄色、岩場に留まった形体等見慣れていたため直ぐクロサギと分かった。

全長約65センチとコサギに比べ幾分大きめ、嘴はためて長く褐色又は緑褐色目先の裸出部は灰青緑色、後頸部に短い冠羽があり、全身黒灰色（黒色型）で脚はやや短めで暗緑色又は緑褐色、足指は黄色味が強く特に足指の裏は目立つ。本種は黒色型と白色型とがあり白色型はコサギによく似るが夏羽では長い2本の飾り羽はなく嘴が黄色くやや太めである。尚色の程度にもよるが白と黒の混じる中間型もあるが日本では殆ど記録はない。

白に僅かに黒色羽の混じった個体が鹿児島県枕崎で観察されている。南アジア、オーストラリア、ミクロネシアに2亜種が分布、日本では中部以南の温暖な地に留鳥として生息するが短距離を季節移動するものもあるらしい。

繁殖の北限は秋田県男鹿半島、太平洋側では神奈川県城ヶ島、千葉県房総半島先端部と言われているが北へ移行の傾向もあるらしい。

習性：岩礁の多い海岸や断崖の続く地形に好んで生活するが、干潟や海岸に近い水田湿地にも見られ魚、貝、エビ、カニ等を動き回って獲ることが多い。岩棚や岩の隙間等に小枝を積み重、粗雑な皿型の巣を造り4～6月頃2～5個を産卵、雌雄で約4週間抱卵、約5週間育雛の後次第に独立して行く。単独、つがいで生活し群れはつくらない。

道内での記録は1973年（昭和48年）5月函館で2羽（白黒不明）1987年（昭和62年）5月奥尻島東海岸で白色型1羽の確認がある。

#### 参考文献

ひがし大雪だよりNo.23号 ひがし大雪博物館  
日本産鳥類図鑑、東海大学出版会、1982年版  
生物大図鑑 鳥類 世界文化社 昭和59年版  
鳥630図鑑（財）日本鳥類保護連盟 昭和63年版



## ウトナイ湖の探鳥会に参加して

### 2. 11. 11 渋井 節子

今日（11月11日）はウトナイ湖で探鳥の会があるとの事で、友人4人と早朝岩見沢を出発。その日は丁度岩見沢は初雪の降った日です。

寒いかと思ひ厚着をして現地に行きましたが、風が少々強い日でしたが、さほどの寒さではありません。

探鳥会に参加したのはこれで2回目で、1回目はやはりウトナイ湖で、日本野鳥の会の方が説明して下さいました。その時は水辺の鳥、山野の鳥でとても分かりやすく説明して下さいまして初心の私でも少々分かりました。

私は現在、森林に囲まれた場所に住んでいます。朝は小鳥のさえずりで目を覚ます事もあります。また仕事の関係で山に入る機会も多くなって身近に小鳥に出会うこともあり「アレ…」あの鳥は何にかなと、段々と関心を持つようになりました。声のさえずりと共に山を歩いていてふと足を止めて、姿の見えるまで待つ時もあります。今日の鳥は何の鳥だったのかな……。帰宅して図鑑を調べてみたりもしてみます。

今回は水辺の鳥が主体で、前回とは違ったアメリカヒドリやヒシクイの大群に出合ったのが収穫でした。

長年の経験か、野鳥の会の皆様方が遠く離れた鳥達を見て、あの鳥は何に、こちらは何にと素早く識別している姿を見て素晴らしいなあと感じました。とうてい私には判らないと思いましたが、それでも一つでも多くの鳥を知るように心掛けようと思いました。

〒066-02 千歳市支笏温泉番外地

〔記録された鳥〕ミミカイツブリ、アオサギ、トビ、ハヤブサ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、マガモ、オナガガモ、ホシハジロ、ミコアイサ、カモメ、ハシブトガラ、シジュウカラ、スズメ、カケス、ハシボソガラス 以上22種

〔参加者〕西川喜久世、渋井節子、小川秀子、新田尚治・ミサ・はるみ、青江 正、吉岡孝夫、富田寿一、柳沢信雄、永島良郎・トキ江、山田良造、井上公雄 以上14名

〔担当幹事〕山田良造、井上公雄



アメリカヒドリ

## 小樽港探鳥会に参加して

2. 12. 9 三浦明子

この十月に本州より札幌に越してきました知人もなく、新聞の小さな案内欄で知った探鳥会に一人参加するのは、少し勇気が要りました。けれども当日の朝小樽駅で、プロミナをかかえて穏やかな笑顔を浮かべている一群の方々を見かけますと、なんだか懐かしさがわいてきました。名札をいただいでいよいよ出発となり、果してどちらへ行くのやら、何が見られるのやら皆目見当もつかぬながら、スズガモの群れの一羽にでもなった気分でした。この時期にしては不思議なほどに暖かな良い日和とのことで、わくわくしながら群れの尻尾について行きました。

海でも山でも、自然の中で自然にしている鳥の姿を見たり囀りを聞いたりするのが好きでしたが、ぼんやりと過ごしてきましたので、野鳥そのものについてはほとんど知識がありません。ことに水鳥に関してはさっぱりです。けれど、最初の祝津港のポイントから、最後の小樽の埠頭のポイントまで、鳥博士のような方々にいろいろ教えていただいたり、プロミナを覗かせていただいたりして、探鳥の楽しさの何たるかを知ることができました。

コオリガモやシノリガモの羽根模様の美しさには、つくづく感心しました。いったいどうしてあのような色模様を持っているのか、自然の造形力はたいしたもの。それから何より一番気に入ったのは、可愛いらしいウミスズメでした。鳴き声になるほど陸の雀によく似ていました。仲良く波間に揺られていたと思うと、あっという間に一斉に水に潜ってしまう様が、うらやましいくらい楽しそうに見えました。

道庁の池で鴛鴦を見つけた時、大通公園で、すぐ脇は激しい車の往来があるのにそれをものともせず、木の実割りに興じる山雀を見た時、北海道は素敵な処だと思いました。今回の探鳥会で、増々この地に魅せられてしまいました。

打ち揃ひ冬波くくるうみすずめ 亜紀子

〒001 札幌市北区北19条西6丁目20番 αNEXT206

〔記録された鳥〕アカエリカイツブリ、ハジロカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、トビ、ハヤブサ、コガモ、スズガモ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、カワアイサ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ワシカモメ、ユリカモメ、ミツコビカモメ、ケイマフリ、ウミスズメ、ハクセキレイ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 28種

〔参加者〕菅原哲夫、高橋孝次・洋、志田博明・政子、松井 昌、栗林宏三、三浦明子、伊藤恭子・聖子、佐藤勇、小路義夫、松本六郎、浅野富美子、小川秀子、笹谷敏郎、榊川 保・弘子、松本美智子、霜村耕介、須藤昌子、石谷義一、白田啓二、三船幸子、佐々木武巳、竹内 強、大西典子、戸津高保・以知子、金沢、佐々木和枝、吉田忠勝、永島良郎・トキ江、今野 弘、富川 徹、新田キノ、山田としえ、森田新一郎、遠藤幸子、富田寿一、渋谷弘子、赤石誠二、三浦美重子、小堀煌治、清水朋子、柳沢千代子、千葉 広、山田良造、佐藤幸典、大野信明、羽田恭子、泉 勝統、逸見康夫、井上公雄 以上55名

日本野鳥の会小樽支部 16名 合計71名

〔担当幹事〕中野高明、井上公雄

## 藤の沢(白鳥園)新年探鳥会

3. 1. 20 奥 邦 夫

平成3年第1回探鳥会。私は昨年12月に入会したばかりの新入生。当日道路は車が多く、10時にやっと着いたが会場は早や会員で満席であった。窓辺に座り楽しそうに給餌台に来る小鳥に見入る人、カメラを手にする人、実に和やかな一時である。中央の席では、たまに逢える仲間と久振りの出会を期に情報交換に盛り上って居る様だ。顔見知りの人々にとっては、新年の挨拶の初会合。

まもなく副会長の司会に始まり、会長の挨拶があり、みんな「新年の顔々」。そのあと、小沢の爺様の永年にわたる野鳥に対する苦労話。突然(話の途中)「リス・リス」と爺様がさけぶ。

なんと給餌台で可愛いエゾリスが一生懸命ヒマワリの

種を食べて居る。会場の皆さんの眼は給餌台に集中……話はしばし中断……。暫く間を置いて再開。自然を大切に理想や執念を説く。誠に立派な御老人と思った。その後、昨年作製したという「野幌森林公園のビデオ」の初公開。クマガラ調査の場面では、会員の顔また顔、あちこちで笑いが……。公園保存保護の為の資料とか……貴重な事だ。御苦労様でしたと言いたい。昼食には小沢の奥さんの豚汁が大変と美味であった。色々と皆さん持合せの物を出し乍らの昼食。和気藹藹であった。

昼食後のシークワーズパズルは、皆さん大変と真剣に挑戦。最後の竹内さんの自分の顔にそっくりの“フクロウ等の絵のクイズ”笑った、笑った。実に楽しい。ユニークな催しだった。自然環境を守る問題は実に多い。

「国豊にして文化滅びる」。とか……野生動物と人間のコミュニケーションが、今の私には救いと思える。

ボランティアとしての善悪の情報交換。溪流釣りでは釣

場は自分の足で探せと言う。探鳥もしかりと思うが……。  
然し、仕事に多忙な方々のため、山田さんの様な情報公開が、他の方々からも有ったらと思う。それが会としての集の一部とも考える。あと一年で古稀の私……自然環境保護の為に何か出来る事がと、口先だけの様で情けない私。

会員の皆さんと一緒に一つでも役立つことが出来たらと楽しみ思った新年第1回の探鳥会であった。

“生命への畏敬 シュバイツアー博士”

〒062 豊平区岸岸7条14丁目2-3-503

〔記録された鳥〕アカゲラ、ヒヨドリ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、シメ、スズメ、カケス 9種

〔参加者〕野坂英三、渋谷一郎・幸子、吉田忠勝、中嶋信子、竹内 強、道川富美子、高橋 洋、大町欽子、佐々木武巳、富樫省三、柳沢信雄・千代子、清水朋子、田中礼子、今野 弘、菅沼良三・富田寿一、松井 昌、鎌田玲子、大西典子、井上公雄、小堀煌治、岩田幸子、武沢和義・佐知子、須藤昌子、沢田美枝子、犬飼 弘、西沢登史子、戸津高保・以知子、赤石誠二、大沼 裕、泉勝統、新妻 博・登貴子、佐藤ケイ、奥 邦夫・智枝子、黒川幸江、佐藤 勇、山田良造、富川 徹、吉岡孝夫、大野信明、国本昌秀、泉屋宣志・悦子、榊川弘子 以上50名

〔担当幹事〕小堀煌治、竹内 強、道川富美子

## 野 幌 の 冬

### 3. 2. 17 渡 辺 紀久雄

前日は大雪、この日も風の冷たい朝で、野幌の森はしんと静まったような感じでした。風のためか、折れた枝が雪の上はかなり落ちていました。その雪の中をラッセルしながら歩いていきました。ひと休みした大沢園地では、レンジャクの群れがヤドリギにたくさんついていました。チリチリという声がよく聞こえてきます。歩くスキーでやって来た人々たちも、さすがに群れているのに気づいて立ち止まって見ていき、「いつもは前だけ見て歩いているけど、気をつけると鳥がいるんだなあ。」と感心して見ていきました。

昼頃になると公園内を歩く人もふえて、道にスキーのあとがつけられ、だいふ歩きやすくなりました。

天候のせい、参加人数は最低だったのですが、スキーで歩けば体は暖かいし、新雪の森の中を歩くのはこれで楽しいものです。

〒003 札幌市白石区栄通18丁目7番19号

〔記録された鳥〕コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、キレンジャク、ヒレンジャク、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、ウソ、シメ 以上14種

〔参加者〕戸津高保・以知子、富田寿一、渡辺紀久雄 以上4名

〔担当幹事〕戸津高保、渡辺紀久雄



#### 〔野幌森林公園〕

平成3年5月5日(日)

夏鳥達も出そろい、1年中で最もバードウォッチングの楽しい時期になります。クログミ、キビタキ、ヤブサメなどが囁り、

大沢の池ではカイツブリやオンドリが姿を見せてくれます。春の野の花を見ながらの気持ちの良い探鳥会です。

午前9時 大沢口駐車場入口集合

〔千歳川周辺一泊早朝探鳥会〕平成3年5月11～12日

12日、朝の4時から千歳川のサイクリングロード付近を歩き始めます。季節も良く、探鳥地も川あり、森林あり、草原に近い部分ありで、ヤマセミ、アカシヨウビン、カワセミを始めとして60種近い鳥が例年観察されます。サンボートの夜、アオバツクヤコノハツクの声も聞かれます。

(1) 日 時：平成3年5月11日(土)午後7時より交流会  
12日(日)午前4時より探鳥会開始、午前10時

#### 頃解散予定

(2) 場 所：「サンポートガーデン」

千歳市蘭越町5 TEL 01232-3-3741

(3) 会 費：2000円程度(夕食付きジンギスカン)

(4) 集 合：午後7時サンポートガーデンまたは午後6時20分 J R千歳駅待合室

(5) 申 込：4月と5月の野幌森林公園探鳥会の時に申し受けます。電話の場合は5月10日までに(011-551-6321) 井上宅まで。

※各自、寝袋もしくは毛布等と翌日の朝食をご用意下さい。

〔鶴 川〕平成3年5月19日(日)

これまで鶴川の探鳥会は秋だけでしたが、今年度より春にも例会が入りました。海岸周辺の環境が変化していますが、チュウシャクシギやキョウジョシギなどのシギ・チドリ類が見られるでしょう。夏羽のエリマキシギやツバメチドリが観察できればいいですね。

午前9時30分 J R鶴川駅前集合

〔植 苗〕平成3年6月9日(日)

美々川がウトナイ湖にそぞく周辺を歩きます。北海道の草原を代表するシマアオジ、ノゴマ、シマセンニュウなどが見られる魅力的な探鳥地です。湖では昨年、アカエリカイツブリやカルガモ、ヒナを連れたコブハクチョウなども観察されました。

午前9時10分 JR植苗駅集合

〔東米里〕平成3年6月16日(日)

年々、自然環境が少なくなってきましたが、それでもオオジシギ、ノビタキ、オオジュリンなどの草原の鳥が見られます。例年アカモズ、アリスイ、ノゴマなどが観察されるのですが、今年はどうでしょうか。

午前8時30分 東米里小学校前集合

市バス米里線 東米里小学校前下車

〔平和の滝〕平成3年6月22日(土)

この所、すっかり定着してきた夜の探鳥会です。コノ

ハヅク(声の仏法僧)の声が山間に響きわたり、ヤマシギやヨタカが夜空を飛びます。昨年はジュウイチ、クロジ、マミジロなどの声も聞くことができました。

午後6時30分 平和の滝駐車場集合

市バス西野平和線 平和の滝下車 徒歩20分

〔福 移〕平成3年7月7日(日)

豊平川と石狩川の合流点付近を歩きます。ここは、河畔林の伐採や敷地改変が続いて、自然環境が年々変わってきています。ウズラ、ノゴマ、ベニマシコなどが今年も観察できるでしょうか。

午前8時40分 市バス札苗線福移入口集合

〔野幌森林公園を歩きましょう〕

平成3年5月26日(日)、6月2日(日)、7月14日(日)

午前9時、大沢口駐車場入口集合

余程の悪天候でない限り行きます。

探鳥会の間合せは 011-551-6321 井上宅まで。



◆総会のご案内

平成3年度の総会を次のとおり開催いたしますのでご参加ください。

日 時：平成3年4月13日  
(土)午後2時

場 所：札幌市民会館(中央区北1条西1丁目)

議 題：平成2年度事業報告

平成3年度事業計画 ほか

◆野鳥写真展のご案内

今年も野鳥写真展を次のとおり開催しますので、どうぞご覧ください。

また、写真の募集も行っています。たくさんのお応募をお願いします。

1 写真展の開催

・北海道電力エレナードギャラリー

(札幌市中央区大通東1丁目)

4月24日(水)から4月30日(火)まで

・たぐぎん本店地下キャッシュサービスコーナー

(札幌市中央区大通西3丁目)

5月1日(水)から5月18日(土)まで

2 写真の募集

・大きさは四ッ切りとし、カラー・白黒は問いません。

・写真には、鳥の種名・撮影年月日・撮影場所・撮影者氏名をつけてください。

・営業中の写真など、マナーに反すると思われるものは、ご遠慮下さい。

・写真以外の絵画・版画などは対象からはずさせていただきます。

・締切日：4月15日(月)

・送付先：〒064 札幌市中央区南6条西11丁目  
共済ハウス内 井上公雄あて

◆ビデオ「野幌森林公園の四季」斡旋について

去る1月20日の「藤の沢新年探鳥会」で試写されました「野幌森林公園を守る会」企画製作のビデオは立派な作品でした。希望の方もおられるとの事で、同会のご厚意により実費で入手出来る事になりました。希望の方は、

下記へハガキ又は電話で申込みください。

記 ビデオテープ(35分間) 1本2500円  
申込先……〒002 札幌市北区篠路2条3丁目11-1  
泉 勝統宛 (TEL 771-3507)

締切日……4月10日

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円 (会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1 - 18287

〒060 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465